

初級後半レベルにおけるアウトプット能力の 向上を目指した実践活動

—オンライン授業における Oral Test と Talking Time の活動を中心に—

宗林 由佳 香川 由紀子 関 ソラ
呉 禧受 小室 輝代 許 明子

要 旨

本稿はNUPACE日本語コースの初級後半レベル（NP2）の授業において、アウトプット能力を向上させるために実施した活動について報告するものである。COVID-19の影響によりオンラインによる授業実施が余儀なくされ、試行錯誤を重ね、作り上げた一つの成果とも言える。当初、対面授業と同様の質の授業を目指していたが、現実には、同じことを同じようにはできないという壁にぶつかった。特に、試験の実施については課題となり、オンライン授業に対応した Oral Test を実施した。またオンライン授業で孤独になりがちな学生たちがコミュニケーションの場を欲していることを踏まえ、緊張感を伴うテスト形式ではなく、他者とのコミュニケーションを楽しめる自己表現活動、Talking Time の活動をユニットごとに組み込むことにした。この活動によりアウトプット能力の向上に繋がったと考える。

キーワード

オンライン授業、初級後半レベル、Oral Test、Talking Time、
アウトプット能力向上

1. はじめに

本稿は名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の初級後半レベル（NP2）の授業において、アウトプット能力を向上させるた

めに実施した活動について報告するものである。2020年度の日本語コースは COVID-19の影響により、従来の対面による授業が実施できず、オンライン形式で授業を行うことになった。初級レベルはチームティーチングによるコース運営を行っており、1学期間15週75コマ（1コマ90分）の授業をオンラインで実施することになる。学習者も教員もかつて経験したことの無い環境に置かれることになり、試行錯誤を繰り返しながらもウィズ・コロナ、ポスト・コロナを見据えて一定の成果が残せたのではないと思われる。NP2コースでは Zoom と NUCT (Nagoya University Collaboration and course Tools)、そして Google Classroom を活用し、従来の対面授業と同等な教育活動を行うことを目指して様々な工夫を凝らしながらコース運営を行った。本稿ではそれらの活動の中で、口頭によるアウトプット能力を向上させるために取り入れた Oral Test と Talking Time を中心に実践報告を行う。

本センターにおける各種日本語コースはインプット能力とアウトプット能力の向上をバランスよく育成することを目指したコースデザインとなっている。インプット量の少ない初級レベルのコースにおいてもアウトプット能力を育成するための様々な活動を取り入れた授業が可能であり、NP2コースのエッセイの作成を通じたアウトプット活動については許(2020)に詳しく報告されている。2019年度はエッセイの作成を通してアウトプット能力を育成するための活動について述べたが、本稿では昨年度の実践を踏まえて実施した口頭による活動について報告する。

2. オンライン授業の実践

2. 1. 背景

2020年4月から一斉にオンライン授業が開始された。準備期間はほとんどなく、手探りの状態で始まったと言える。名古屋大学では独自に開発された NUCT、CANVAS（名古屋大学の LMS：Learning Management System）が用意されていたが、「日本語」は語学の授業であり、資料配信、動画配信型が可能な講義形式の授業とは基本的に性質が異なる。LMSは

学習者にはポータルサイトとして機能させ、実際の授業は同時双方向型の授業が可能となる Zoom meeting を用いてリアルタイムで配信する方法が選ばれた。国際言語センターでは各教員に Zoom のアカウントが用意され、Zoom meeting を使って授業ができるようにすること、またオンライン用の教材を作成することが急務の課題となった。

2. 2. Zoom meeting を取り入れた授業

同時双方向型の授業が可能となる Zoom meeting を使うことで、以下のことが可能となる。

1. 教員と学生がお互いの顔を見ながら授業を進めることができる。
 - ①大学のキャンパスが立ち入り禁止の状況においてお互いの安否を確認することができた。
 - ②外出がままならず、部屋に閉じこもった状態の学生にコミュニケーションの機会を提供することができた。
2. 対面型授業と同様に、共有画面を活用して授業のインプット活動ができる。
 - ①白板の代わりに、Zoom の共有画面を使うことにより、手書きツール、スライド、Word 等を画面で共有しインプット活動が可能となった。
3. ブレイクアウトルームを使うことでグループワークや個人指導が可能となった。
 - ①教師の一方向型の進め方だけでなく、学習者同士のピア学習が可能となった。またチャット機能を使えば、教員と学生の双方向のやりとりが可能となる。さらに、教員は各ブレイクアウトルームに入り、グループワークの活動に参加することができ、助言等をすることも可能となった。こうした小グループでの活動を通して学習者同士の距離、そして学習者と教員の距離を縮める大きな効果があった。また、個人指導、オーラルテストや筆記試験等のフィードバックでは、対話の形が可能となり、対面と同じ環境を

作ることができた。オンライン形式であっても互いの人間関係を築くことができた。

以上のことから、Zoom meeting でオンライン授業を行う場合においても、インプット活動・アウトプット活動も対面型と変わらない質の授業が再現できたという喜びがあった。しかし一方で、教室の場の雰囲気、つまり、学習者の理解やその状況を見ながら練習を増やしたり、説明をしたりするといったその時間の学習者の状況に合わせて授業を進めることができるという点に関しては課題を残すこととなり、やはり教師から一方的に発信しがちになることは否めないと思われる。

2. 3. Google Classroom の活用

「Google Classroom」はオンライン授業のより効率的な実施に適しており、菊池・内野(2019)では、「Google Classroom」を大学の授業に取り入れた理由として、以下のように述べている。

(前略) 教員は Google ドキュメントで作成した課題やテストを学生全員、または選択的に共有することができ、生徒は Classroom や Google ドキュメントから直接課題を提出することができる。またペーパーレスで素早く課題を集められ、フィードバックや採点を一か所で管理することができ、教員の仕事量の単純化による時間の短縮が実現可能である。さらに、課題や資料は全て Google ドライブにバックグラウンドで自動保存されるため、紛失の心配もない。(菊池・内野 2019: 3)

また、菊池・内野(2019:4-6)は、実際授業で Google Classroom を使った結果、受講生の75%超が Google Classroom の導入に関して肯定的な評価をしており、成績処理や学生への対応などにおける教員の負担も大幅に減ったと報告している。このようなことから、2020年度秋学期の NP2 授業では、受講生全員が Google account を持っており、Google Classroom

に接続することができることを確認し、課題だけでなく、授業全般において Google Classroom を活用している。

Zoom meeting を取り入れた授業では、教師が各グループに時間をかけ参加することはできるが、全体のグループの進捗状況を把握することは瞬時には難しい。そこで学習者が編集・作成することができ、その作業を可視化できる Google Classroom の機能を取り入れることにした。

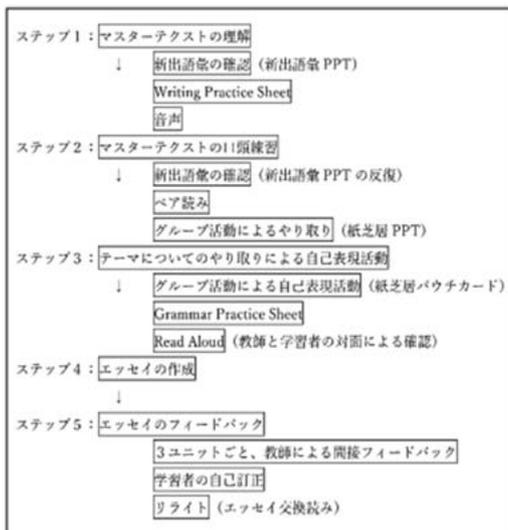
3. オンライン授業におけるインプットとアウトプット能力の向上に向けた試み

Zoom を使って同時双方向型の授業を対面授業に似せて試行錯誤を重ねてみたが、ユニットごとに同じパターンで繰り返されることに教師自身が活動の限界を感じていた。2020年秋学期には、Google Classroom の使い方を教員が学び、課題編集機能・作成機能を取り入れることとした。こうしてオンライン授業の形態は、主として同時双方向型 Zoom meeting を使い、補助的に Google Classroom の機能を取り入れ、様々な活動を試みた。実際にオンラインの授業によって授業活動がどのように変わったのか次節で述べる。

3. 1. Section 1 と Section 2

主教材『NEJ (A NEW APPROACH ELEMENTARY JAPANESE) – テーマで学ぶ基礎日本語 Vol.2』(以下、NEJ)の進め方については、許(2020: 73)で以下のように示されている。

ステップ1とステップ2のマスターテキストが、Section 1と Section 2 にあたる。ここでは、各ユニットのテーマで登場人物の話が展開されており、この部分が自己表現活動の学習軸となる内容である。NP2日本語コースの従来の対面型の授業では、新しい語彙、文法・文型が含まれるマスターテキストを使ってインプット活動が行われてきた。新出語彙 PPT、紙芝居 PPT (マスターテキストとなるナラティブを文ごとにイラストと日本語で示し、紙芝居式に1枚ずつめくって練習するための PPT。イラ



ストに文を付したもの、イラストにキーフレーズのみを付したもの、イラストだけのものと、3パターンある)、パウチカード (ペアやグループで学習者自身が手に持って扱えるように、紙芝居 PPT を小さくして印刷したカード) などの副教材を活用し、口頭練習を重ねる活動である。Zoom meeting を使った双方向型の授業でも同様のやり方で進めていた。しかしこのような活動には問題もある。PPT を共有画面で見せていても、学習者の目は教科書に向かっている。PPT を見ながら紙芝居のストーリーを教師の声で聞かせていても、学生は文字を追うことをしていたのだ。マスターテキストをただ繰り返させる練習に過ぎず、さらにパウチカードを使うアウトプットを目的とした活動も、マスターテキストを言えるようにする練習に過ぎなかった。

しかし、オンライン授業に切り替わった時に大きな問題が起こった。それは教科書入手の問題だった。通常、大学内や近隣の書店で簡単に手に入ったものが、コロナ禍で書籍販売が全てオンライン販売となり、注文が集中し、在庫が品薄になったうえ、注文しても手元に届くまでに時間を要

した。秋学期にはさらに状況はひどくなり、海外での教科書入手は数ヶ月かかるという事態となった。そこで手元に教科書がないという状況に置かれ、教師の教材作成はもともと副教材にあった新出語彙 PPT と紙芝居 PPT をもとにスライドを作り、そのスライドでストーリーを聞かせ、授業を進めることとなった。

3. 1. 1. 授業の実際

学生は授業に参加するときに、まず Zoom meeting に入る。そして教師から Google Classroom を開け、指定された課題スライドを開けるよう指示される。教師は Zoom の共有画面を使って同じ課題スライドを見せる。以下、活動の流れを示す。

【段階 1】文法・文型を理解し、文を正しく産出する段階

文法・文型に特化したスライドを見せる。絵を見て文の意味を理解する。

次に新しいスライドを見せ、学生に考えさせる。絵を見て一文を作ることができたら、数枚のスライドで確認する。次にペアになりスライドを使って練習する。

【段階 2】ストーリーのスライドを使って話を聞かせる。談話レベルでの理解を促す段階

ストーリーがわかるようスライドの枚数を調整し作成したものを見せ、ストーリーを 2 回から 3 回聞かせる。3 回目には前半を教師が言い、後半を学生が作っていく。

4 回目にはすべて絵を見ながら進めていく。

【段階 3】スライドを使ってアウトプットの活動

ペアになってスライドを自由に並べ替えてストーリーを作る。ストーリーを再生する学生もいれば、自分で自由を作る学生もいる。メンバーを交替し適宜繰り返す。

教科書が手元にないということが、学生を集中させストーリーに耳を傾けさせることにつながっている。そして教師も、教科書のマスターテキストに縛られることなく、スライドを使って自由に話を作る環境を提供することができたのだ。対面授業とほぼ同じ内容のことをしているはずだが、教科書がないことで学生は自分で考え、文を産出するようになる。マスターテキストに縛られることなく、自分で考えて話す、このプロセスこそ、アウトプット活動の要だといえる。

オンライン授業がインプット活動をより自己表現活動に上げていけるという可能性を示唆したが、同時に口頭能力の測定にも広がりを見せたことを次章で述べる。

3. 2. Oral Test

オンライン授業への移行に伴う学習者のアウトプットを促す試みとして、2020年春学期 NP2 クラスでは、新たに Oral Test を取り入れることを試みた。本節では、Oral Test の実施背景、方法、結果について報告する。

3. 2. 1. 実施の背景

NP2 クラスでは筆記テストを4回実施している。筆記テストには、毎回、イラストを見て文を作る問題が含まれる。これは、先述のように本授業が「各ユニットのセクション1にある“personal narratives”（ナラティブ）をまずマスターテキストとして習熟し、これをまねて自分の話を書くこととその書いたものに習熟する」という教科書の方針（マスターテキスト・アプローチ）に沿って、PPT でイラストを見ながらナラティブを通して文型・文法や語彙を繰り返し学ぶ方法をとってきたことに基づいている。授業では繰り返し口頭練習を行い、筆記テストでは、授業で扱ったナラティブの中のイラストを、単語やフレーズ単位の情報を付して提示し、学習者に文を作成させる。ひらがなやカタカナなど、表記が正しいかどうか評価の対象に入れている。

しかしオンライン授業への移行に伴い対面での筆記テストが不可能に

なり、NUCT の小テスト機能を使用した入力形式をとることになった。NUCT では記述式の問題を出題することも可能であり、実際に単語や動詞・形容詞の活用を変えて入力する問題も出題されるが、日本語のタイピングに慣れていない初級レベルの学習者が文章レベルの日本語をタイプするには時間がかかり、タイプミスの確率も高くなる。タイプミスなのか理解できていないのかが判断しづらく、またそれによる減点は学習者のモチベーションを下げることにもなる。そこで、日本語の理解に焦点をあてて測れるよう、この部分を Oral Test に変更し、学期中に 2 回実施した。

Oral Test では、さらにコミュニケーション能力も測ることにした。繰り返しナラティブを学び自分のことが話せるようになることのほかに、授業では教科書のナラティブについての Q&A や、ペアワークで学習者自身について質問をし合うなどの活動を取り入れている。しかし、従来は人数的にもスケジュール的にも、学習事項を応用してコミュニケーションがとれるかどうかをひとりずつ Oral Test で確認することが難しかった。今回、履修者が 7 名で人数的にも可能であり、またオンライン授業に移行したことで学習者の様子が詳細につかみにくい点を 1 対 1 で話して確認する機会も必要であったことから、コミュニケーションを含む Oral Test を実施することにした。

3. 2. 2. テストの内容と実施の方法

Oral Test は、順番と時間を決めて Zoom でひとりずつ実施した。授業開始時に全員が Zoom に入室し、実施方法や時間を再確認した後、ブレイクアウトルームに各自待機してもらうことで、遅刻などによる混乱や時間のロスを避けた。

Oral Test は、上述したようにふたつのパートに分かれている。それぞれのテストは、以下の方法で行った。

① イラストを見て文章（ストーリー）を作る

教科書のナラティブに沿って 10 のイラストを Zoom の共有画面で提示

し、口頭で答えてもらった。イラストは流れがわかるようにすべて1枚のスライドに載せたものを用意した。同時に共有画面ではイラストが小さくて見えづらいことを考えて、スライド1枚につきひとつのイラストを載せたものも用意し、学習者に見やすい方を選択してもらった。後者の場合は、学習者が完全に発話し終わったことを確認してから、次のスライドに進むよう留意した。

②学習者の作文に基づいて質問に答える / 会話する

コミュニケーションをとる際にはトピックが必要である。Oral Testには、学習者が課の終わりにまとめとして毎回書く作文のトピックを用いた。学習者は課ごとに教科書のナラティブをモデルとして自分のことを書き、教師のチェック、自己修正、ピア・レスポンスを経て、最後にクリーンコピーを提出している。テストではまず、テスト範囲の課（1回目：Unit13「毎日の生活」、Unit14「わたしの楽しみ」、Unit15「わたしの将来」、2回目：Unit19「訪問」、Unit20「ほめられたこと・しかられたこと」、Unit21「しつけ」）の作文の中からひとつを選んで学習者自身が音読した後で、教師から内容について質問した。

また質問に1文で答えるだけでなく、学習した表現をたくさん使って学習者のほうから話を展開させるよう促した。教科書に沿ったモノローグだけではなく、会話の中に学習項目を応用することを意識させた。

3. 2. 3. 評価基準

評価基準は以下のように、①と②でそれぞれ設定し、各項目につき4段階で評価した。①3項目9点満点、②3項目9点満点、合計18点である。音読については課ごとにナラティブの「Read Aloud」（3. 2. 4で詳述）でチェックしているため、作文の音読は評価に含めなかった。

学習者にはテスト予告時に、①は内容、文法、なめらかさを、②は質問を理解して答えたかどうか、文法や発音がよかったかどうか、たくさん話したかどうかを見ることを伝えた。

①イラストを見て文章を作る

	3	2	1	0
内容	習った表現を使って、絵に即した文が作れる。	習った表現を使えないときや、間違いがいくつかあるが、文は作れている。	絵と合っていない文が多い。習った表現は少ないが、意味は通じる。	テストを受けなかった。
文法	文法・語彙の間違いがほとんどない。	間違いがいくつかある。	間違いが多い。	テストを受けなかった。
なめらかさとスピード	とてもなめらかに言えて、スピードも適切で聞きやすい。	すらすら言えるが、スピードが少しゆっくりで、ときどき聞きにくい。	すらすら言えず、スピードが遅い。聞きにくいところが多い。	テストを受けなかった。

②エッセイを読んで質問に答える / 会話する

	3	2	1	0
内容理解	全ての質問の意味を理解して答えた。	聞き返しが何度かあるが、質問には答えた。	聞き返しが多くて、答えられないときがあった。	テストを受けなかった。
答え方	文法や発音の間違いがほとんどなく、なめらかに答えた。	文法や発音にいくつか間違いがあり、ときどき不自然な間があった。	文法や発音の間違いや不自然な間が多いが、最後まで答えようとした。	テストを受けなかった。
発話の量	質問に対して、習った表現を使い、長い文で答えた。コミュニケーションに積極的に参加した。	文が短いときもあるが、質問に対する答えとして、必要な情報は入っていた。	短い文や、単語だけのときがあったが、答えた。	テストを受けなかった。

3. 2. 4. 結果

1回目、2回目ともに受講者7名全員が受験した。①については授業で繰り返し練習していることから、学習者はやり方をすぐに理解してとりかかった。「内容」と「文法」については、イラストに添えられた情報まで

入れて正確に言えない場合や、言い直しや助詞の間違ひが見られたが、全く答えられないという学習者はおらず、全員が2点以上を獲得していた。1回目、2回目とも「内容」は平均2.6点、「文法」は平均2.4点であった。「なめらかさとスピード」に関しては、こちらも1回目、2回目とも平均2.3点であったが、3点から1点と学習者によってばらつきが見られた。点数が高かった学習者は、日頃ナラティブを声に出して練習している成果が出たと考えられる。これは、Oral Testを実施したことで明らかになった点である。

②については、発話量を測ることを予告していたためか、質問にはなるべく長い文章で答えていた。「内容理解」「答え方」「発話の量」の平均点はそれぞれ1回目2.4点、2.4点、2.8点、2回目2.9点、2.8点、2.9点であった。扱う課も評価者も異なるため一概には言えないが、2回目はやり方がわかり慣れてきたためか平均点は上がっている。

どのような質問をされるかわからないことから、テスト②に関しては初めは緊張している様子も見られた。しかしテスト①と作文の音読を入れたことによって口慣らしができ、話そうとする意欲が見られた。学習者の方から教師に質問をして会話をつないでいくまでには至らなかったが、教師からの質問に答える際にさらに新たな情報を付け足すことで会話を発展させようと意識していることが感じられた。

NP2では発話能力を測るための活動として、「Read Aloud」と発表を設けてきた。「Read Aloud」は教科書の一部を音読し、「なめらかさとスピード」、「発音」の2つのカテゴリーをそれぞれ3段階で評価するもので、課ごとに行う。意味の切れ目で切っているか、正しく発音できているかを測るものである。また発表は、テーマに沿って原稿を書き、PPTで資料を作成し、練習して皆の前で発表するというもので、学期中に2回実施してきた。発表の際の発音やスピードなどについての詳細な評価基準は設けず、準備、内容、発表の様子（発音・態度・質疑応答）を総合してAからCで評価する。両者は学習者が自発的に発話することは促せるが、他者とのやりとりに発展させていくことを促すことは難しい。学習項目は、

応用してコミュニケーションをとれるようになることが重要であり、今回のような Oral Test を通して、それを学習者に意識づけていく必要があると思われる。

テストの終わりに近況を聞くと、オンライン授業に移行して大学で友達に会えないこと、日本語を話す機会もなくなってしまったこと等、COVID-19の影響によるストレスを口にする学習者もいた。オンライン授業において、学習者の様子をひとりずつ確認し、日本語で話す機会を作ることの重要性を再確認した。今回の Oral Test はその糸口にはできたが、テストという場では学生は緊張し自由な発話も限られる。学習者が交流しながら発話できる活動を取り入れていくことが必要であると痛感した。

3. 3. Talking Time

3. 3. 1. 「Talking Time」の導入の背景

石崎・許・俵山(2020)によると、NUPACEの初級クラスの学生は授業以外で日本語を話す機会が他のレベルの学生より少なく、店やレストラン、日常生活で使う日本語を学びたがっており、緊張せずに話すこと、日常生活の会話ができるようになるのが目標だと言う。また、NP2授業では、教科書のマスターテキストに基づいて学習をさせながらも、3. 1節で述べた「Section 1と Section 2」においては、マスターテキストに縛られることなく、スライドを使って自由に話を作る環境を提供するなど、アウトプットを重視する活動も取り入れたが、それでも完全に学習者自身のことに基づいて、学習者同士で自由にコミュニケーションする時間ではなかったため、そのための時間が必要となった。さらに、前節で記述したように、2020年度春学期のNP2授業で行った「Oral Test」の実施により、学習者が学習項目を応用して日本語で話せる機会を提供し、それを評価に反映することができたが、その反面、テストであることから学生が緊張して自由に発話できず、学習者同士で交流しながらコミュニケーションできる活動ではなかったという限界もあり、それに対する改善策を考える必要があった。

特に、2020年度秋学期では、春学期同様、COVID-19の影響で対面授業ができず、春学期に続き、新規交換留学生の受け入れがなかったため、交換留学生を対象とするNUPACE日本語プログラムを開講することができなかった。そこで、名古屋大学国際言語センターでは、すでに名古屋大学の交換留学生として選ばれたが、渡日できていない学生や、来年度名古屋大学に交換留学することを希望している外国の協定大学の在学学生を対象とする日本語研修プログラムを作り、日本語を教えることにした。このような背景から、2020年度秋学期のNP2の授業は、受講生全員が自国からオンラインで受講することになり、授業の時間以外に彼らが日常生活の中で日本語で話す機会はさらに減り、ほとんど機会がない状況であった。

以上の背景を踏まえ、2020年度秋学期のNP2授業では、受講生のアウトプット能力の向上を目指す活動の一環として、受講生が日本語で自由に話す時間を増やすことを目的に、「Talking Time」を導入することにした。

3. 3. 2. 「Talking Time」の概要

「Talking Time」は、各課で学習した語彙、表現、文法、文型の復習を兼ねて、それらを応用し、受講生達に自分のことを自由に話してもらうための時間として導入した。これは各課の学習項目の復習と応用のための活動であるため、各課の学習が終わった時点で1コマ(90分)全体を使って実施した。

「Talking Time」の流れは、概略的に「話すテーマの紹介」→「話す内容の準備(構想・記入・確認・修正)」→「発表と質疑応答、話し合い」のように進めた。「Talking Time」は受講生に自由に話してもらうための時間ではあったが、講師からの最低限の手助けもなくいきなり発言をさせると、学生はどれについてどのように話せばいいかわからず、話し合いが進まない可能性が高い。そのため、今回は教師が予め各課の学習項目が復習できる、学生達が楽しく話せそうな身近なテーマを定め、授業の冒頭でその日の「Talking Time」でみんなで話すテーマを紹介する時間を設けた。

また、テーマが決まっても、それだけでは単純なQ&Aやおしゃべ

りに留まる可能性があるため、「Talking Time」では、ペアワークやミニプレゼンテーションのような活動を取り入れた。ペアワークの効果は、学習者同士のインターアクションの中で互いに学びを深化させていく（中原・増田・河内 2013）、相手がいることで、コミュニケーションストラテジーを身につけ、会話に積極的になる（井脇 2019）など、数多い研究からも実証されている。また、高屋敷（2014）では、初中級日本語会話クラスにおけるミニスピーチとスライドを使ったプレゼンテーションの効果について、学生主導の自発的な学習が可能になり、発表のために既習の学習項目だけでなく、未習の文法や単語も使いこなせるようになるなど、教師主導の会話練習よりも多くの効果があると述べている。このようなことを踏まえ、「Talking Time」でも、受講生により効果的に会話をさせるために、ペアワークやミニプレゼンテーションを導入した。さらに、受講生により積極的かつ効率的に会話に参加してもらうため、ペアワークやミニプレゼンテーションでは Google Classroom を使って話す内容を準備させた。特に、「Talking Time」では、Google Classroom の様々な機能の中でも、Google スライドを使った課題を設定することで、毎回話す内容の準備に活用した。Google ドキュメントや Google スプレッドシートもそうであるが、Google スライドも、クラスの構成員全員が一つのファイルを同時に作成・編集することができる。そのため、一つのスライドファイルの複数のページを学生一人一人に割り当てると、それぞれの作業内容がクラスの構成員全員でリアルタイムで共有でき、学生が自分のスライドを作成しているとき教師が個別に指導することもできるため、時間を短縮することができ、非常に便利である。また、文字だけでなく、図形や絵、写真なども簡単に貼り付けられ、学生一人一人が話すとき、プレゼンテーション資料としてそのまま使えるため、「話す」活動に適した機能であると言える。そのため、「Talking Time」の「話す内容の準備（構想・記入・確認・修正）」では、Google スライドを活用することにした。

話す内容の準備が終わったら、作ったスライドをみんなで見ながら「発表と質疑応答、話し合い」を行った。もちろん話す内容の準備段階でも教

師と学生は互いに話し合いながら準備を進めるが、それは最終的に「発表と質疑応答、話し合い」の段階で学習したことをきちんと使って話すことができるようにするためである。したがって、「Talking Time」では、この活動に重点を置き、時間を多めに取って受講生に自分のことについて話してもらい、その後は、受講生が互いに質問し合ったり、時には一人の受講生の発言内容についてみんなで話し合ったり、互いの話に対する感想を言い合うなど、できるだけ受講生がたくさん話せるように心がけた。

3. 3. 3. 実例

本節では、「Talking Time」の実例を挙げ、具体的な実施方法について述べる。

まず、教科書の内容に沿って、Unit13「毎日の生活」では、「私の毎日」をテーマにし、自分の毎日の生活の流れについて図1のようにGoogle スライドを作成させた。

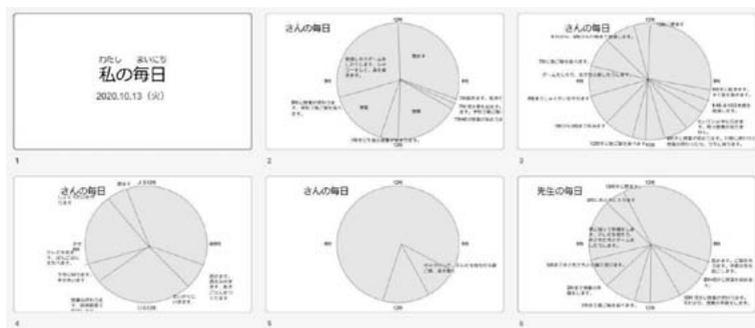


図1 ユニット13の Talking Time

スライドを作成するときも学習した文法項目を使って日本語で会話ができるように、Zoomのブレイクアウトセッションを使い、ペアで互いに「○さんは毎日何時に起きますか」などの質問をして、ペアの相手のスライドを作成するように指示した（この日は受講生の一人が早退したため、教師が途中から代わりに入って活動を行った）。全てのスライドが完成した

後、自分が作成したスライドを基に、ペアの相手の一日を紹介させ、所々教師が具体的な内容について質問をして答えてもらった。Unit13で学習した文法項目は、「～たら」「～てから」「～とき」「～ながら」であった。受講生達はこれらを使って、「起きたら、歯をみがきます」「テレビを見ながらご飯を食べます」などの文を作っていた。最初は図を作成する作業に少し時間がかかっている様子も見られたが、すぐに慣れ、ペアで活発に話しながらスライドを作り、発表も問題なくできていた。

Unit14は趣味や好きなことに関する課であり、「～の」「～こと」を学習した。そのため、「Talking Time」のテーマも「わたしの楽しみ」にし、好きなこと（現在、子供のとき）と趣味、きれいなことについて話してもらった。この日もペアで質問し合いながらペアの相手の好きなこと、趣味、きれいなことについてスライドを作成するように指示し、図2のようなスライドを作らせた。その後、みんなの前でペアの相手のことについて話してもらい、教師がそれについて具体的な質問をした。受講生たちは「○○さんは何が好きですか」「料理をするのが好きです」「趣味は何ですか」「趣味は本を読むことです」のような文を作り、話し合っていた。

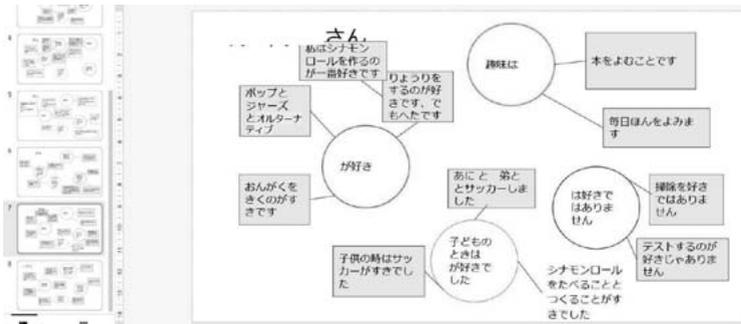


図2 ユニット14の Talking Time

Unit15は「～つもりです」「～とおもいます」「～かもしれませんが」「～かどうかわかりません／決めていません」などの文型を学び、自分の将来について話す内容であったため、テーマは「私の将来」にし、受講生同士

でインタビューをすることにした。まずは教科書の人物であるりさんの話をモデルとして示し、この情報を得るためにはどのような質問をすればいいかについて確認し、各自ペアの相手に聞きたい質問を作らせた(図3の左)。その後、ブレイクアウトセッションでペアでインタビューをしながら、聞いた内容をメモさせ、間違えたところに印を付けて自分で直させた。インタビューとメモが終わった後は、みんなの前でペアの相手のインタビューの内容を発表させた。

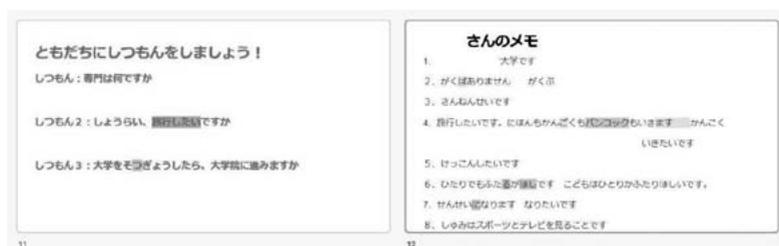


図3 ユニット15の Talking Time

Unit16は、可能形を学習し、「できること・できないこと」に関する課であったため、「Talking Time」では、「Job interview」をテーマにした。まず、図4の上のように、モデル文を提示してから、ペアで面接官と求職者になって、互いにインタビューをしてメモするように指示し、図4の下のようなスライドを作ってもらった。その後の発表でも、勉強した文法と文型(可能形、「～ようになりました」、「～たいと思っています」など)を使い、自分ができることについて話していた。また、受講生同士で互いの発表内容を聞き、質問し合っていたことから、きちんと学習項目が身につく、理解して応用することができることが確認できた。

Unit17、18では、授受表現を学習したため、「お礼のカード」と「ボランティアの経験」をテーマにし、「～てくれる」「～てあげる」などを使って話してもらった。その後、図5のようにスライドを作らせ、発表をさせた。スライドには各自簡単に書いていたが、話す時間には授受表現を使い、より詳しく自分の経験について話していた。また、この日は、自分のボラ



図4 ユニット16の Talking Time



図5 ユニット17、ユニット18の Talking Time

ンティアの経験を話し合った後、日本人3名のボランティア経験に関するVTRも視聴し、教師以外の日本人の話し方や文型の使用様相に気づかせる機会を設けた。

3. 3. 4. まとめと今後の課題

2020年度秋学期のNP2授業に導入した「Talking Time」は、NUPACEの初級日本語学習者のニーズと2020年度春学期のNP2授業の振り返り、そして、社会状況により来日できず、自国で授業を受ける受講生のために作られた。教科書の各課の終わりにテーマを定め、それに関してペアワークを行い、Google Classroomでスライドを作りながら学習項目を復習し、ミニプレゼンテーションと質疑応答、話し合いの時間を通してもう一度話す機会を与えた。

「Talking Time」を導入したことにより、先学期より会話の時間が増え、日本語で話せる時間が絶対的に不足している受講生たちにも、緊張せずに受講生同士で自由に話すことができるいい機会を提供できたと思われる。また、学習項目を復習し、応用することができるため、学習の面において

もいい効果が期待される。現在は秋学期の途中であるため、まだ「Talking Time」の効果や受講生の反応について明確には調べられていないが、実際「Talking Time」を通して受講生が完全に身につけていない項目や間違っていた項目などを自分で使ってみることで正しく覚えることができている、学習効果があることが確認できた。また、「Talking Time」に臨む受講生達は積極的にペアワークやスライドの作成、ミニプレゼンテーション、質疑応答などに参加しており、自分の話をしたり、クラスメートの話を聞くことも楽しんでいることも伝わってきた。一方、より楽しく話を広げるのに適したテーマと活動の選定に、各教師が色々と検討を重ね、工夫しなければならないことは、「Talking Time」の運営の難点である。さらに、オンライン授業であるという制約の影響ではあるが、活動が毎回ほぼ同じパターン（ペアでインタビュー→スライド作成→発表）になりやすいという点は今後改善すべき点として挙げられる。また、自由に話してそのまま終わるのではなく、「Talking Time」の最後に、毎回自分やクラスメートの活動を評価したり、振り返って考える時間があると、より効果的ではないかと考える。

今後も引き続き「Talking Time」を実施し、テストやアンケートなどを通して、「Talking Time」の効果に関してもしっかりと考察し、記述したいと考える。

4. おわりに

コロナ禍において、私たちの日本語プログラムはオンライン授業への移行を余儀なくされた。当初、私たちは臨時的な代替授業という位置づけで始めたのだが、実際にオンライン授業を試行錯誤で続けていく中でオンラインという環境だから可能となった様々な側面を見ることができた。対面授業では経験できなかったアプリを駆使した教室活動が、学生の積極的な授業参加に結びつき、アウトプット活動を活性化し、さらにアウトプット能力を高めることができたことと実感している。今後の課題として、授業形態を対面授業に一本化するのではなく、対面授業とオンライン授業のそれぞれの良さを活かしたハイブリット型授業の構築を考えていきたい。

参考文献

- 石崎俊子・許明子・俵山雄司（2020）「名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の日本語教育に対するニーズ調査—2019年11・12月の調査において—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』27、pp.85-104、名古屋大学国際言語センター
- 井脇千枝（2019）「『流暢さ』の向上を目指す教室活動の実践報告：一質問リストを用いたペアワーク」『日本語教育方法研究会誌』25巻2号、pp.56-57、日本語教育方法研究会
- 菊地直子・内野秀哲（2019）「大学の大人数授業におけるアクティブ・ラーニングを意図した「Google Classroom」の活用」『仙台大学紀要』50巻2号、pp.1-7、仙台大学
- 高屋敷真人（2014）「初中級日本語会話クラスにおけるミニスピーチ：プレゼンテーション・プロジェクトの実践について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』24、pp.71-90、
- 中原なおみ・増田真理子・河内彩香（2013）「ペアワークを中心とした会話練習におけるインターアクション観察—活動の各段階で、どのような学びが起きているのか—」『日本語教育方法研究会誌』20巻1号、pp.112-113、日本語教育方法研究会
- 西口光一（2012）『NEJ A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE テーマで学ぶ基礎日本語 VOL.2』、くろしお出版
- 許明子（2020）「自己表現活動を取り入れた学習指導の有効性について—初級後半レベルにおける授受表現及び受身表現のエッセイの分析を通して—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』27、pp.69-84、名古屋大学国際言語センター

